届け 世界の果てまでも

令和２年１１月１３日
No. 47
文責　校長　飯久保一男

色彩感覚

芸術の秋です。図工・美術大会の作品に取り組んでいるクラスもあります。今号は，日本人の色彩感覚について書いてみます。　　…マメ知識のような通信になってしまいましたがご容赦ください。

アメリカに行ったとき，手洗い場のハンドソープを押してみて，手をひっこめた経験があります。何と蛍光ピンクの液体が出てきたのです。海外のお菓子などには，こんな色のものを食べて大丈夫かなと思われる毒々しい色のものもあります。子どもたちの絵でも，海外の子どもの作品は原色をそのまま使っているものを見ます。日本と海外の国々（人々）との色の感覚の違いに驚くことがあります。

条例などの規制によるのかもしれませんが，日本では観光地で，コンビニなどの派手な看板が，セピア色になっているものを見かけることがあります。海外の事情はくわしく知りませんが，日本人の景観への細やかな配慮のような気がしています。左の写真は鳴沢村にあるコンビニの看板です。富士山の景観への配慮だと思われます。

江戸時代，幕府は「奢侈（しゃし）禁止令」を出し，庶民のぜいたくを禁じました。庶民が木綿と麻以外を着ることを禁じる法律でした。着る色としては，高貴な色とされてきた紫や紅色などのものを着ることを禁止とし，庶民が着るふさわしい色として，茶色，鼠色（ねずみいろ）などの地味な色を強制したのです。この禁止令はたびたび出され，そのたび内容が厳しくなり，幕府は庶民の暮らしの締め付けを強めていきました。「百姓は生かさぬように，殺さぬように」という幕府の農民観が，江戸時代の長い間，続いていたことがよくわかる事例です。

しかし，そんな中でも，人々によって「四十八茶百鼠（しじゅうはっちゃひゃくねずみ）※」といわれる繊細な色彩感覚が生まれました。茶色や鼠色など，限られた地味な色の中に，わずかな違いを楽しむ美的センスが生まれたのです。限定された中でも色の違いを楽しむ，日本人の美的な色彩の感覚とたくましさの伝わる話です。

※四十八茶百鼠　…茶系，鼠色（灰色）系の染色のバリエーションを指す言葉です。「四十八」「百」は「たくさん」という意味です。実際は茶系も鼠色系もそれ以上のバリエーションがあったそうです。（裏面参照してください）

私は，図工の授業で，水彩絵の具の使い方の指導をするときに「絵の具会社の色を信じてはいけない」（語弊があります）という言い方をすることがあります。例えば「水色」です。日本には，青系の色だけでも，５０種類以上もの色の名前（裏面参照してください）があります。それなのに，あの色を「水色」という名前にしまったのです。もし，名付けた人がいるのなら，声を大にして文句を言いたいと思っています。

「あの色に『水色』という名前を付けたから，
小学生が水をかくときにあの色を使ってしまうじゃないですか！」

子どもたちに，こんな話をすると，「水は『水色』ではない」ことを意識してくれます。

①水道の蛇口から「水色」の水が出てきたらどうだ？　おいしそうと思って飲むか？
②「水色」の雨が降ってきたらどうする？　白い服が水玉模様になるかもしれないぞ。

…ちなみに今，子どもたちが持っている絵の具には「水色」という名前の色はありません。青色の絵の具が入っているだけで，「水色」はありません。「水色」らしき色が入っているセットでは，ペンテルが「そらいろ」，サクラが「セルリアンブルー」という名前で入っています。私のように考える人から「水色」のネーミングに苦情でも入ったのでしょうか？「水色」と「空色」「セルリアンブルー」は同じ色ではなく，明確な違いがあるのですが…。

以前には絵の具に「肌色」という名前の色があったことをご存知でしょうか。クレヨンにも色鉛筆にもありました。これは差別用語とみなされ，名前を変えたとのことです。「肌色」があったときは，子どもたちは，顔も，手も，足もみんな「肌色」でかきましたから，私はこの名前が変わってよかったと思っています。また，知らず知らずのうちに子どもたちの中にできてしまう，色の感覚があります。土は茶色，木も茶色，葉は緑，髪の毛は黒※，唇は赤…，などのことです。こういう感覚も指導の中で変えたいと思っています。

※髪の毛は黒 ←これも今の時代では差別用語になるのでしょうか？

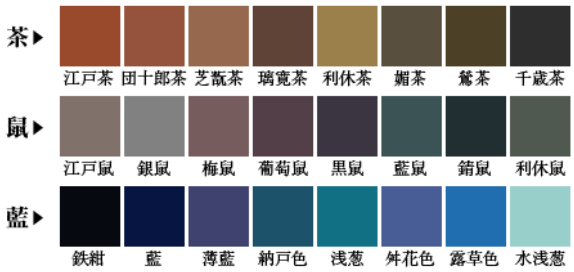
テレビの情報番組で５００色の色鉛筆が販売されていると話題になっていました。図工・美術の教員としては，つい食指が動いてしまいそうになります。私は８４色の色鉛筆セットは持っていますが，さすがに，これはすごい，そして，欲しいと思ってしまいました。色鉛筆は，絵の具のように混ぜて色をつくることができませんので，数が多い方がいいのです。５００色もあると右の写真のように並べれば，ステキなインテリアにもなりそうです。この色鉛筆は，日本の会社の製品です。こういう細かな色彩感覚が日本人にはあるのです。この日本人独特の色彩感覚は，前述のように日本の歴史や風土が大きく関わっています。

…日本人は，日本の歴史が長いことにあまり自覚をもっていませんが，他の国に侵略されることなく，高度で自立した文化が長く続いてきたことは，世界史の中で例を見ません。日本は長期に渡って独自の文化を育んだ結果，世界の中でもユニークな存在になっています。四季がはっきりとし，山々は四季折々の色を見せ，適度に狭い国土であったことも有効に働き，文化の交流が盛んに行われ，それぞれの地域でも特徴のある文化が発展してきました。前述したこと以外にも色の感覚の違いの例はいくつもあります。例えば，虹の色を表すのには，日本では「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」の７色とされますが，国によっては虹の色を２色とする国もあるのです。

水色の例で書きましたが，日本では，青系の色の名前だけでも，

藍色（あいいろ），蒼（あお），群青（ぐんじょう），杜若色（かきつばたいろ），桔梗色（ききょういろ），紺色（こんいろ），菖蒲色（しょうぶいろ），菫色（すみれいろ），鉄紺（てっこん），瑠璃色（るりいろ），浅葱（あさぎ）…

と５０以上の名前があります。しかも，同じ色ではなく，すべて微妙に違う色です。赤系や緑系などのそれぞれの色にもたくさんの色の名前があります。これらもすべて微妙に違う色です。調査によると，日本には１,０００以上の色の名前があるとのことです。これは世界にも例がないようです。日本のアニメーションが，世界で高い評価を受けているのは，こういう日本人の繊細な色彩のセンスも評価されていると思っています。



日本の学校教育では，今，グローバルな社会の中で生きていく資質の育成が求められています。そのためには，まず，日本のよさを理解することが必要です。四季に恵まれ，長い歴史の中で繊細な色彩の感覚を育んできた日本の伝統を引き継ぎ，子どもたちの中に育てることは大切なことだと思います。

色彩感覚に限らず，こういった伝統や，人々の努力・創意工夫によって生み出された一つ一つの日本のよさを子どもたちに伝えていくことは，私たち大人（教師たるものはもちろん）の役割であると思っています。

次号「日本が誇れること」へ続きます。